國學院大學学術情報リポジトリ

# On the Nasal Form of Syllable-initial g in Japanese



| メタデータ | 言語: jpn |
| --- | --- |
| | 出版者: |
| | 公開日: 2023-02-05 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 上野, 善道 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.57529/00000854 |

# ガ行鼻音考

上　野　善　道

**キーワード**

カ行鼻音　分布　切れ目　対立　意味　外来語

## 1．はじめに

### 1.1　用語

「ガ行鼻音」とは，軟口蓋鼻音 [ŋ] を音節頭子音として持つ [ŋa, ŋi, ŋu, ŋe, ŋo; ŋja, ŋju, ŋjo]（ないしその子音のみ）を指すもので，カタカナ表記では「カ゜，キ゜，ク゜，ケ゜，コ゜，キ゜ャ，キ゜ュ，キ゜ョ」とする。「ガ行口音」としての軟口蓋破裂音 [g]（入力の関係で記号は [g]=[g] とし，その中に音声変種としての [ɣ] も含む）を音節頭子音としてもつ「ガ，ギ，グ，ゲ，ゴ，ギャ，ギュ，ギョ」とは区別される。ちなみに，[kaŋko:]（観光）などの音節末子音の [ŋ] は，[k, g, ŋ] の前で出る撥音 /N/ の異音で，ガ行鼻音には含まれず，ここでの対象とはしない。これは，ガ行鼻音の消失という変化と無関係に一貫して保持されている。

ガ行鼻音は「鼻濁音」とも呼ばれ，むしろその方が一般的であるが，鼻濁音の用語は２義をもつ。今一つは，「前鼻音（prenasal）を伴った濁音」で，[˜ba, ˜do, ˜gu, ˜dze] などを意味する。カナでは「ᵑバ，ᵑド，ᵑグ，ᵑゼ」と表わす。本稿では，史的説明で前鼻音化濁音 [˜g] に触れるのみで，専らガ行鼻音 [ŋ] とガ行口音 [g] との使い分けの詳細な実態を問題とする。

### 1.2　ガ行音の歴史概観

まずは，私の考えるガ行音の歴史を大まかに概観しておく。(1) を参照。

（1）ガ行音の歴史

環境：　（i）　（ii）　（iii）　（iv）

語頭　[ˆg-] → [g-] = [g-] = [g-]

非語頭 [-ˆg-] = [-ˆg-] → [-ŋ-] → [-g-]（[-ɣ-] も含む）

音韻：　/ˆg/　/ˆg/　/g//ŋ/?　/g/

つまり，元々は語頭・非語頭を問わず前鼻音を持った [ˆg] であったものが，次の（ii）の段階では語頭で前鼻音が落ちた。ここまでは音素としては /ˆg/ のままであった。その次の（iii）の段階では語中で逆に前鼻音が全体を鼻音化して [ŋ] になって，語頭と非語頭に応じて口音 [g] と鼻音 [ŋ] が使い分けられるようになり，音韻解釈をめぐる議論が話題となった（私の場合は /g/ と /ŋ/ を立てるが，それは本文から自明となるであろう）。その後で，後述するようにガ行鼻音の消失という現象が進み，（iv）の段階で環境を問わず [g] のみとなっている。

これを表わす仮名文字は，最初から一貫して「が，ガ」のままで，仮名が作られた段階ではガ行鼻音 [ŋ] がなかったために，それを表わす仮名もなかった（当時の中国語漢字音を見ても，その反映は見られない）。ガ行鼻音は（iii）の段階になって発生したものである。従って，元来の鼻音であったナ・マ行は語頭でも非語頭でも環境を問わず出て来るのに対して，後から鼻音化したガ行は語頭には出て来ない（[ŋ-] が欠落している）という分布差がある。実際には，接続助詞であった「～が」がその前で文が切れるようになって生じた接続詞の「が」が，元々の鼻音を保っていたことにより，語頭にも立つ数少ない例の一つになっているが，これについては後に述べる。

なお，この論文の対象ではないが，方言に関しては，（i）の段階が淡路島や高知県に報告されている。また，ごく一部，（1）とは別の変化をして語頭も含めて [ŋ] になった方言も浜名湖周辺や豊橋市，和歌山県北部に報告されている（上野編1989）が，私が豊橋市周辺を調べた限りでは見つからず，すでに消滅した可能性がある。

### 1.3　不幸な歴史

さて，かつては標準音とされ，「美しさ・正しさ」をもった「規範」として推奨され，それを持たない地域（北関東や，中国地方から西のほとんどなど）の学校教育，取り分け音楽教育にも普及が試みられてきたこのガ行鼻音も，結局，全国に普及することはなかった。それどころか，肝腎の東京の中でその衰退・消失（ガ行口音への合流）が話題になってから，すでに90年近く経つ[1]。当初予想されていたよりも保存している個人は東京あるいはその近郊にそれなりにいるものの，全体として消失の流れは疑いようもないほど確か

である。また，京都など各地でも同じ変化が進んでいる。かつてはガ行鼻音をもたない人はなれないとされたアナウンサーの世界も，それを持たない人がニュース放送のチーフを務めたり，NHK の式典の総合司会を務めたりするという例は，もはや珍しくなくなった。ガ行鼻音自体が持っていたかつてのプラス評価も逆転している感さえある[2]。

その流れを受けて，研究者もこれを持たない人が大勢を占めるようになってきている。ガ行鼻音の研究も，専らその消失過程を細かく追うのが主流である。ガ行鼻音の事実に対する無理解が一般化し，現象自体を軽視する風潮も見られる。音韻論においても，ガ行鼻音の存在には触れても，語頭の口音の [g-] と非語頭に出る鼻音の [-ŋ-] が相補分布をなして同じ音素に属するとする，あまりにも単純な記述が大半を占める。瑣末な問題として付録的な扱いをしていると言っても過言ではない。とりわけガ行鼻音をもたない執筆者は，両者の対立はないことを自明の出発点として，結局そのままの結論を出している感があり，そういう論は知的好奇心を刺激することがない[3]。

しかし，翻って考えると，その区別がしっかりしていた段階においても，その記述は十分になされてきたのであろうか。そう反省してみると，決して十分ではないと思われる。ほとんどが決まりきった概説で終わっている状況である。ガ行鼻音は，その意味で，その出発点からいわば「不幸な歴史」を持っていたと言っても過言ではない。消失間近のいわゆる「危機音声」として，今こそ詳細な記述が必要であると考える。これが本稿執筆の動機である。

### 1.4　本稿のねらい

これを受けて，本稿のねらいを次の点に置く。それは，標準音論でも規範論でもない。多人数調査に基づく消失過程の社会言語学的研究でもない。また，音韻理論研究でもない。そうではなくて，ガ行鼻音を保持している個人の立場から，その詳細な実相を私一人の内省で描き出すことにねらいがある。すぐ後に述べるように，私は東京人ではないが，さりとて特殊な方言の例示を意図するものでもない。方言における鼻濁音保持が背景にはあるものの，これまでの50年近い東京での生活において，古い世代の東京方言と（後述の外来語を一先ず除けば）基本的に一致していると見て構わないという体験に基づいて私の内省を記述する。迷う点，揺れる点，以前とは変化した点も含めて，これまでのガ行鼻音論では触れられることのなかった微細な意味の違いにまで踏み込んだ記述を試みたい。

### 1.5　私の言語経歴

上記の目的のため，まずは私自身の略歴を書くことから始める。

1946年 岩手県雫石（しずくいし）町に生まれる。両親・祖父母とも同一町内の出で，大学で上京するまで同居していた。小中学校は地元の学校で，高校は盛岡市に汽車通学。1965年から東京の大学に。その後，大学教員として，青森県弘前市２年，石川県金沢市５年を経て，再び東京で今日に至る。ガ行鼻音が不安定な東京での生活が一番長くはなっているが，岩手・青森・石川ともガ行鼻音が健在な地域で，岩手・青森は前鼻音もある。配偶者は盛岡市の出身。

母方言である雫石方言には，(2) のような区別がある。/k/ と /g/ と /ŋ/ の対立例が豊富にあり，混同することはない。「。」は無声化の印，アクセントは省略するが，上の２系列は，「告げる」を除けばアクセントも一致する（②型）。―の*makeru に当たる形は欠けている。

(2) ３系列の対立例

| | | |
|---|---|---|
| [tsu̥keru]（付ける） | [tsugeru]（突ける＝可能） | [tsuŋeru]（継げる＝可能，告げる） |
| [su̥keru]（時化る） | [sugeru]（敷ける＝可能） | [suŋeru]（茂る，鼻緒をすげる，人名「滋」） |
| [kaki]（下記） | [kagi]（柿） | [kaŋi]（鍵） |
| ― | [mageru]（負ける） | [maŋeru]（曲げる） |

方言ではこのように３つを完全に区別するが，標準語を発音する時は，両方を異なるシステムとして使い分けている。母方言は [g] と [ŋ] はまったく別の音として区別していることはすでに述べたが，カ行音に対応する [-g-] は標準語では [-k-] に直す。しかし，[-ŋ-] に関しては，そのまま標準語に持ち込んでいる。この [-ŋ-] を別の音である [-g-] に直すことは決してない。「これが」を [ga] で発音することは，言語学・音声学の時間に「引用形」として発音して見せる以外，想像すらできない。「これか」という別の意味になってしまうからである。

そのことを裏付けるエピソードを２つ紹介する。１つは「防衛大学校」であり，１つは日本語学会の学会誌名が『日本語の研究』に決まった，いわば裏の理由である。

「防衛大学校」は学生時代に初めて見た単語で，[ŋ] であることに疑問の余地のない「大学，大学院」と違い，その語構成も意味も分からなかった。未知の単語でカ゜かガかが分からず，正にそのためにこの単語を口にできない時期が続いた。しばらくして「大学校」という別組織で，「気象～，自治～」等々のあることが分かり，それなら [ŋ] だとなって，それ以降は安心して口にできるようになった。[g] と [ŋ] はそれくらいはっきり違う音なのである。

２番目は，「国語学会」が「日本語学会」に変更され，その理事をしていたときに議題

となった学会誌名の話である。検討班から出てきたのは２案で，『日本語の研究』と並ぶもう一つの案は『日本語学会誌』であった。しかし，私は，「後者は語構成が不明であるのみならず，それに対応する問題として下線部がカ゜かガか分からない。鼻濁音を持つ会員が口に出せないような学会誌名にするのは問題だ」と発言した。(3) を参照。その音声の「]」はアクセント核，「=」は無核の印，「|」はアクセント単位の切れ目を表わす。

(3)　　語構成　　発音

a. 日本語学会 | 誌 ニホンコ゜カ゜ッカ ] イシ

b. 日本語学 | 会誌 ニホンコ゜カ゜ッカ ] イシ

c. 日本語 | 学会誌 ニホンコ゜ガッカ ] イシ，ニホンコ゜=| ガッカ ] イシ（音声は同じ）

（d. 日本 | 語学会誌 ニホ ] ン | ゴカ゜ッカ ] イシ）

（3a）と（3b）は同じ発音だが，それはそれでどちらの語構成なのかが問題となり得るし，その（3a）（3b）に対して（3c）ならば，これは発音が違って来ることになる。(3c) ならばガで，先の２つのカ゜とははっきり区別されるので，どちらでも良いとはならない[4]。(3d) は意味的に当てはまらないはずであるが，もしあるとしたら，発音もアクセントも別になってしまう。鼻濁音のない人はすべてガなので，（3a）～（3c）では少なくとも発音の問題は生じないはずであるが，それでも語構成を扱おうとすると問題になるであろう。(3a) か（3b）かは，そもそも「日本語学会（学）会誌」が元になっていて，決めようがない問題かもしれない。このような問題をいろいろ含む名称は望ましくない，と主張したのであった。理事会議事録には「「語構成がはっきりせず、どう発音していいか迷う」という意見が出され」とある。卑見に対する理事一人一人の意見は聞いていないが，これが『日本語の研究』に決まる一つの力になったものと思っている。

もっとも，これだけガ行鼻音にうるさい私ではあるが，上京直後はガ行口音が気になり仕方なかったものの，ガ行口音 [-g-] 中心に向かいつつある世界に50年近く暮らしていて，随分鈍感になってきている。ガ行鼻音のない地域に調査に行った際，[kaŋi]（鍵）と言って聞き返されたり，「蟹」と誤解されたりすることがあり，そういう地域では自ら [kagi] と発音することもあったりする。その結果，今や，ガ行鼻音をまったく持たないアナウンサーの発音さえ，ニュースの内容に集中すると気にならなくなっている。もとより，一度観察モードに切り替わると，すぐに違いは分かり，気になり出すのではあるが。

## 2. ガ行鼻音概説

論に先立ち，従来知られていたことを（4）にまとめて示しておく。(4a) ～（4f）は私

も完全に一致する。というよりも，語例は私自身のものを掲げてある。(4g)の外来語例も，切れ目（|）の直後でない限り，私にとってはすべて鼻音 [ŋ] で，それ以外はありえない形である。

(4) ガ行鼻音の概要

a. 語頭は [g-], 非語頭は [-ŋ-] が大原則である（以下，それぞれ [g]，[ŋ] と略記）。

和語単純語

上カ゜ル，カキ゜（鍵），スク゜，カケ゜，過コ゜ス等。

複合語の後部要素がカ行子音の連濁の場合

山カ゜タ，川キ゜シ，穴ク゜マ，鼻ケ゜，口コ゜モル等。

２字漢語（後部漢字が単独で [g] であっても [ŋ] に[5]）

市カ゜イ（外，街），詩キ゜ン，抜ク゜ン，証ケ゜ン，監コ゜ク等。[k] の連濁形の三カ゜イ（階）に同じ。

b. 一方，次のものは非語頭でもそこで切れて [g] になる。

繰り返し[6]

ガラ|ガラ，ギリ|ギリ，グズ|グズ，ゴミ|ゴミ（オノマトペ，玩具，副詞，サ変動詞）；

げじ|げじ（虫），侃々-諤|々（かんかんがくがく）など。

Cf. ニキ゜|ニキ゜，モク゜|モク゜；命カラカ゜ラは非語頭ゆえ [ŋ]。ただし，ジグザグ。

数詞の「五」――語頭に準じて [g] となる（‖ はアクセント単位の切れ目の印）

ジュー‖ゴ（15），ヒャク‖ゴジューバン（150番），デゴイチ（D51）等。

Cf. 十五夜，七五三，七五調，三々‖五々は，全体で語彙化していて [ŋ]。

c. 語頭でガ行鼻音が出る少数例。

接続詞の「が」は，接続助詞の「が」に由来し，元の [ŋa] を保持する。

「(～である。) カ゜，しかし」＜「～であるカ゜，しかし」。

「～の如し，如く」も，単独でもコ゜トシ，コ゜トク。

「～ぐらい」もク゜ライ（例：「クライかク゜ライか，という問題」）。

「～ごろ」もコ゜ロ（例：「６時頃，あくまでもコ゜ロですよ」）。

助詞「が」もカ゜（例：「助詞のワとカ゜」，「カ゜とワの違い」）。

私は先行ハを [ハ] と文字読みする時のみ，口音の「ハとガ」になる。

d. 接頭辞「お」の後は口音の [g] となる。

お行儀，お義理，お具合，お元気，お原稿，お下品等。ただし，お行儀の儀は [ŋ]。

e. 接頭辞「不，非」の後は鼻音 [ŋ] になる。

不義理，不合理，不合格；不具合 [ŋ]（ただし，不具合のみ [g] とも言う[7]）；

非合法, 非合理 [ŋ]。ただし,「非 ‖ 合理的」は, アクセント単位が切れるために [g]。

f. 無意味な音節連続の読みは同音の連続。

ガギグゲゴ，カ゜キ゜ク゜ケ゜コ゜；ゲゲゲの鬼太郎等。

Cf. ガカ゜ンボ ; 峨峨たる，疑義，午後。繰り返しではなく，いずれも [g-ŋ-]。

g. 外来語については, 研究者により記述がさまざま。話者によっても異なるとの前提。

口音が原則で，ガガーリン，エネルギー等とする人。

同じくドグマ，ハロゲン，そして消し | ゴム，キロ | グラムだが，慣用久しい語はイキ゜リス，ベルキ゜ー，オルカ゜ンとなるとする人。消しゴム～消しコ゜ムとする人も。

東京の中・高年層は，和語・漢語と同様に鼻音の傾向ありとする人。

これまで知られている口音と鼻音の最小対を，できるだけ実在する単語で置き換えると (5) のようになる。従来は「大烏」と「大ガラス」のような，如何にも無理に作った感じの，現実に大きなガラスを見ても「大ガラス」と言うことはないだろうと思えるような例が多かった。それでも例としての用は足りるが，なるべく，より自然なものにしようとしてみた。「琉球ガラス」は実際に沖縄で使われている例である。「琉球烏」は, 厳密には「琉球嘴太烏（ハシブトガラス）」だという（ただし，琉球方言の音声を問題にしているのではない。ガ行鼻音の出る琉球方言はごく一部に限られる）。「人ゴミ」も，自然とは言えまいが，海の側をタクシーで通ったときに運転手が実際に使った言葉である（その時にこの例に気付いたもので，その人が「人込み」と区別するかは不明）。

(5)

| 鼻音 [ŋ] | 口音 [g] |
|---|---|
| 琉球カ゜ラス（烏） | 琉球ガラス（ガラス） |
| 小学校（制度） | 小学校（規模）[ 後述 ] |
| 人込み | 人ゴミ（サーファーの群れの様を人のゴミに喩えて） |
| 中学頃 | 中学ゴロ（中学のごろつき） |
| （～の）如し | ゴト師（パチンコの。隠語・俗語ではあるが） |
| （～の）如く | 五徳（道具） |
| 英語 | A5（紙サイズ） |

## 3. 東京方言外来語調査報告

私自身の発音について述べる前に，生粋の東京人５人[8]にガ行音を含む外来語25語について聞いた結果の報告を行なう。まずはその結果を一覧の形で（6）に示す（空欄は調査漏れ）。

(6)

| 25語＼５人（西暦生） | KS（'26） | OI（'28） | AK（'28） | KK（'28） | IA（'72） |
|---|---|---|---|---|---|
| アスパラガス | ŋ | ŋ | g | g | g |
| アマルガム | ŋ, g | g | g | g | ŋ |
| アレグロ | ŋ, g | ŋ | g | g | ŋ |
| アレルギー | ŋ | ŋ | ŋ, g | g | ŋ |
| イデオロギー | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| イレギュラー | ŋ, g | ŋ, g | g | g | ŋ |
| ウルグアイ（地） | g | g | g | g | ŋ |
| エネルギー | ŋ | ŋ | ŋ, g | g | ŋ |
| エレガント | ŋ | ŋ | ŋ, g | g | ŋ |
| エンゲル（人） | ŋ | ŋ | ŋ | g | ŋ |
| ガガーリン（人） | g | g | g | g | ŋ |
| ガラパゴス（地） | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| シカゴ（地） | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ |
| シャガール（人） | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| シンガポール（地） | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ |
| スパゲッティー | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| タイガー | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ | ŋ |
| ドグマ | ŋ | ŋ, g | ŋ, g | g | g |
| ドゴール（人） | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| ニューギニア（地） | g, ŋ | ŋ | ŋ, g | g | ŋ |
| ハロゲン | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| ハンバーグ | | ŋ<br>（-カ゜ー） | g, k（-ク），<br>g（-ガー） | g | ŋ<br>（祖父母 -ク） |
| ヘーゲル（人） | ŋ | ŋ | g | g | ŋ |
| ヨーグルト | | ŋ | ŋ, g | g | ŋ |
| レギュラー | ŋ | g, ŋ | g | g | ŋ |

この表から言えることは，大きく３つある。まず，ほぼ同年代の高齢層の間の個人差が大きいこと。次に，25語中で５人全員が [ŋ] の単語は，「シカコ゜，シンカ゜ポール，タイカ゜ー」の３語のみであり（タイガーは後述），それに対して，全員が [g] の単語は１つもないこと。

最も注目されるのは，その中で一番若い1972年生まれの話者が一番多く [ŋ] を保持していて，かつ，その実現は，「ドグマ」[g] の一語（私は [ŋ]）を除き，私と一致することである。さらに，のちに第５節で取り上げる『明解国語辞典』，『NHK 日本語発音アクセント辞典』の語例は私と完全に一致するものであった[9]。このことから，私自身のガ行鼻音の記述が特殊な方言例ではないことを意味するものと捉えることが許されるであろう。

## 4.「私のガ行鼻音」各説

以下に取り上げる主なものは，東京方言の中でも複雑な様相を見せる次の２点である。

１つは，単独でガ行 [g] で始まる語が複合語後部要素で [-g-] を保つか [-ŋ-] に交替するかで，

「- 学（学校，学部等），- 議（議会，議員），- 楽（楽器，楽団等），- 銀，- 癌，- がら」等の語例を具体的に問題にする。

２つ目は上で問題にした外来語（カタカナ語）で

「ガガーリン，ドグマ，ハロゲン，消しゴム」等

がどう発音されるかである。なお, 以下の私見の結論部分は拙論（2014）にも書いてある。

### 4.1 「小学 [ŋ] 校」と「小学 [g] 校」は違う

次の（7）に示すように，学校制度であるか，学校の規模であるかで [ŋ] になるか [g] になるかの違いがある。その対のない例も付け加える。「―」はその意はありえない意味で用いる。

(7)

| | 学校制度 | 学校の規模 |
|---|---|---|
| 小学校 | [ŋ] | [g] |
| 中学校 | [ŋ] | [g] |
| 大学校 | [ŋ] | [g] |
| 女学校 | [ŋ] | ― |
| 高等学校 | [g] | ― |

この使い分けにより，次の文は完全に文法的な文として成り立つ。

(8)「あの中学 [ŋ] 校は小学 [g] 校で，こっちの小学 [ŋ] 校の方が，はるかに大学 [g] 校だ。」

もう少し説明を加えると，前部要素「小中大」の意味がポイントになる。まず，前部要素の意味,「小，中，大」の具体性 / 抽象性により [g]/[ŋ] に分かれる。そして，規模の大小の意では前・後部の意味がそれぞれ生きて「小 | 学校, 中 | 学校, 大 | 学校」で [g] になる。

一方，学校制度では一体化して抽象的意味の「小学校，中学校，大学校」で [ŋ] になる。

なお，このような対立があると言っても，通常は後者の意味で使われることは言うまでもない。前者が使われるのは特殊な状況だけである。対立があるということと，両者が対等な関係にあるかどうかは別のことである。このため，この文脈で小学 [g] 校は変だと思いつつも，通常は「小学 [ŋ] 校」のつもりだろうと私も理解する。誰かが外を見ながら「あっ，ア [メダ」（[ は音調の上昇の印）と言うのを聞いた東京方言話者が，「飴」のはずはないから「雨」に違いないと常識的に判断するのと同じである。音韻対立と常識的意味判断の視点は，常に分ける必要がある。

次に，制度の中では，前部が1音節か否かで [ŋ]/[g] が決まる。

(9)「- 学校」（制度）の前部要素の音形

女，夜，私；小，中，大，農；盲，聾，兵 -：学校 [ŋ]（結合が密であるため）

夏期，各種，師範，私立，音楽，国民，日曜 -：学校 [g]（結合が疎であるため）

ただし，「盲，聾，兵 -」は，[g] で言っても私はそれほどの違和感がない。子供の頃に「盲学校」は盛岡にあるとは聞いていたものの，実際には知らないし，「聾学校」はもっと馴染みがなく，「兵学校」に至っては戦前のもので，他に比べて縁遠いことは考えられる。しかしながら，まったく架空の，馴染みのない例でも明確に [ŋ] だと言えることが多い以上，「盲，聾，兵」は「小，中，大」に比べて意味がより具体的で，それだけ独立度が高いから，と考えるべきであろう。音形に加えて意味の関与がある。「女，夜，私」も意味は具体的であっても語形は短い1モーラで，同じ1音節とは言え「盲，聾，兵」は2モーラで，より自立性が高い。

なお，「高等学校」は，祖母をはじめとして，東北各地で高齢者が [ŋ] で発音する例を耳にしている。これは，その世代にとって新制高校は当時まだなく，かつ旧制高校はほとんどの人に無縁な存在であったことが関係している。祖母などは「尋常小学校高等科」との区別が付いていなかった。そのために「尋常小学校」に併せて [ŋ] で発音していたものと考えられる。

### 4.2 「- 学」と「- 学科，- 学部，- 学者，- 学会」は [ŋ]

次は，「学校」との関連で，「学 -」に関わるいくつかの例を見る。

(10) 医学，文学；言語学，音声学，農芸化学，原子物理学；

言語学科，英文学科，日本語学科，人文社会学科；

文学部，理学部，工学部，経済学部，国際関係学部；

文学者，言語学者，政治学者，音声学者，理論物理学者

これらの例はすべて [ŋ] になる。「言語学科，言語学部，言語学者」の本来の切れ目は一体「言語学 | 科 / 部 / 者」なのか，「言語 | 学科 / 部 / 者」なのか不明だが，いずれにしても「- 学」までは一まとめにし，そこまでガ行鼻音が及ぶ。「文学部」も切り方に関わらず [ŋ] である。

ただし，「学会」まで広げると，「日本語学会」だけが私の中で不思議な動きを見せる。

（11）医学会，言語学会，国語学会，英語学会，音声学会，国文学会，スペイン語学会，フランス語学会，インドネシア語学会，…：[ŋ]

これらはすべて [ŋ] である。ところが，「日本語学会」のみ，あるときから [g] も可になり[10]，自分の中で次第に [g] へと定着しつつある。語構成が「日本語 | 学会」でも [ŋ] のはずで，前はそう発音していたのに，なぜなのかは未詳である。-Nŋ-ŋ- の音配列の回避であれば，「スペイン語学会」にもあるはずなのに，こちらは [ŋ] で安定しているからである。「日本語」が 4 モーラで強いまとまりを持つためであろうか。

関連する可能性のある例がもう一つある。「- 語学」[ŋ] の中の「日本語学」である。やはり（12）の「- 語学」[ŋ] の中の例外的なユレの例だからである。

（12）言語 | 学，国語 | 学，英語 | 学，ドイツ語 | 学，朝鮮語 | 学，中国語 | 学，イタリア語 | 学，ルーマニア語 | 学，…：[ŋ]

「古典語 | 学」[ŋ] だが，「古典 | 語学と古典 | 文学」は，「語学」と「文学」の対比効果により [g] も可となる。しかし，「国語学と国文学」は [ŋ] のみしかない。ところが，「日本語学」のみ，「日本の語学」ではないにもかかわらず，なぜか [g] も許容しそうである。特に雑誌名は，今やむしろ「日本語 [g] 学」と言ってしまいがちである。

「学会」に戻ると，「- 学校」と「- 学会」は振る舞いが違う点がある。（13）である。冒頭の 3 項目は両者の振る舞いに違いはない。ところが，4 番目からは違いが出て来る。

（13）

| 学校 | 学会 |
|---|---|
| 某 ‖ 学校 [g] | 某 ‖ 学会 [g] |
| 本 / 両 ‖ 学校 [g]（本 / 両校） | 本 / 両 ‖ 学会 [g] |
| 新 | 学校 [g] | 新 | 学会 [g] |
| 何(なに)学校 [g]（主）～何学校 [ŋ] | 何(なに)学会 [ŋ]（主）～何学会 [g][11] |
| 英語学校 [g] | 英語学会 [ŋ] |
| ドイツ語学校 [g] | ドイツ語学会 [ŋ] |
| イタリア語学校 [g] | イタリア語学会 [ŋ] |
| インドネシア語学校 [g] | インドネシア語学会 [ŋ] |

上の（13）の「某，本，両，新」の例は，（14）の「数，貴」と同様，その直後に切れ

目があり，その結果 [g] を取るものである。（アクセントの対立のあるものはそれも丸付き数字で付した。）

(14) 新 | 学校 [g]　　進学 | 校，神学 | 校 [ŋ]
　　新 | 学者 [g]　　進学 | 者，神学 | 者 [ŋ]
　　新 | 学科 [g]（ッ）③　　進学 | 科，神学 | 科 [ŋ]（ク ,ッ）⑤③
　　数 | 学者 [g]（数人の学者）　　数学 | 者 [ŋ]
　　貴 | 学科 [g]（ッ）②　　器楽 | 科 [ŋ]（ク ,ッ）④②
　　新 | 外車 [g]　　侵害 | 者，新 | 会社 [ŋ]（連濁）
　　新 | 技官 [g]　　審議 | 官 [ŋ]

従って，(13) の冒頭３つが両者同じ [g] なのは接頭辞がもたらす切れ目のなせる業であって，「学校」と「学会」は異なる振る舞いをすることが分かる。片や「学校」という単位が最初から固定しているのに対して，片や「- 学」の拡張としての「学会」という位置づけの差と考えられる。

実は，規模の「大中小」もこの接頭辞の類で「大 | 学会」[g] となり，「大学 | 会」[ŋ] とは異なる。他に「大 | 学者 / 学科」，後出の「大 | 議員 / 楽団」，さらに「大 | 劇場」等も，対の有無とは無関係に [g] である。「（築地）小 | 劇場」も [g] で，[ŋ] だと「笑劇 | 場」になってしまう。

### 4.3 「両議 [g] 員」と「両議 [ŋ] 院」は異なる

次に，「議」が関係するものを見てみる。まずは，「- 学校」とよく似て，前部要素の音形の長さで決まる「- 議会，- 議員」の例を (15) に示す（なお，前が短いと「- 議員」より「- 議」が普通ではある）。２モーラ２音節の語例は見付けにくいが，「仮，にせ」などでも [g] になる。ただし，１音節でも「大 | 議会」は，そもそも規模の意しかない接頭辞で [g] である。

(15) 村，町，道；市，区，都，府 -：議会，議員は [ŋ]。（町議，都議も [ŋ]）
　　にせ，地方，臨時，欧州 -　　：議会，議員は [g]。

本節表題の例に関しては，「衆 / 参議院 [ŋ] | 議員 [g]」であり，「衆 / 参議院 [ŋ] | 議長 [g]」であることが出発点となる。そして，その後半要素の「議員 [g]」を二人組み合わせた「山田・佐藤の両 | 議員」も [g] である。「衆参 ‖ 両 | 議長 [g]」もまた同様である。

一方，「衆議院と参議院 [ŋ]」を合わせると「衆参 ‖ 両 | 議院」になるが，「両」と「議院」[g] で切れそうなのに「両議院」[ŋ] となる。これは，「衆議院，参議院」が [ŋ] で，かつ「議院」単独では使わないことから，私の頭の中で「衆」と「参」の位置にそのまま「両」が

入った形である。「衆議」と「参議」は対になりにくく，異分析が働くのである。もとより，本来の言い方は「衆議|院，参議|院」で「両院」であろうが，ここはそうではない言い方を想定しての扱いである。

### 4.4　音楽の「- 楽，- 楽器，- 楽団，- 楽曲」

「管弦楽器」は [ŋ] であるのに対して，「金管楽器」は [g] が主であり，両者は一致しない。データは（16）のようになっている。音楽に明るくなく，該当する表現があるのか不安もあり，疑問の箇所には「？」を付す。ただし，この疑問は [ŋ] か否かに関するものではない。

| | | | |
|---|---|---|---|
| （16）管弦楽 [ŋ] | 管弦楽器 [ŋ] | 管弦楽団 [ŋ] | 管弦楽曲 [ŋ] |
| 吹奏楽 [ŋ] | 吹奏楽器 [ŋ] | 吹奏楽団 [ŋ] | 吹奏楽曲 [ŋ] |
| 交響楽 [ŋ] | — | 交響楽団 [ŋ] | 交響楽曲？[ŋ] |
| — | 金管楽器 [g] が主 | —? | —? |
| — | 木管楽器 [g] が主 | —? | —? |
| — | 打 / 管 / 鍵 / 弦楽器 [ŋ] | —? | 打 / 管 / 鍵 / 弦楽曲 [ŋ] |

「〇〇楽」があれば [ŋ] で，「〇〇楽器」も [ŋ] である；なければ（—）「楽器」の前が 1 音節ならカ゜，２音節以上はガ（が主）となる。「楽団，楽曲」はすべて [ŋ] のみである。つまり，「〇〇楽器」を発音する際に，「〇〇楽」までで意味のあるまとまりをなすかどうかを見て，まとまりをなせば [ŋ] に，なさなければ再度前部要素を見てその音形で判断する，という手続きを踏んでいることになる。なお，「—?」の箇所も，言えば「金管，木管」の後は [g]，他は [ŋ] となる。

### 4.5 「- 銀（金属）」—「金銀 [ŋ]」と「金銀 [g]」の別

まず，「- 銀（金属）」の関係を見る。

（17）賃銀（賃金），水銀，白銀（雪の意），いぶし銀，金銀（～財宝，のメダル）：[ŋ]
　金|銀（金と銀，将棋の金と銀も），純|銀，にせ|銀，延べ|銀，一分|銀，二朱|銀：[g]
　塩化銀，沃化銀，フッ化銀，硫酸銀，シアン化銀：[ŋ]～[g]

「賃銀」は今「賃金」と書くくらいで，「銀」との関係は最も弱い。「水銀，白銀」も「銀」という意識が薄い。「いぶし銀」も比喩的に使うのが普通である。これらは [ŋ] である。一方，「純|銀，にせ|銀，延べ|銀」は「銀だ」という意識が明瞭に出て [g] で発音する。歴史上の「一分|銀，二朱|銀」も同様である。「純銀」を [ŋ] で発音すると，何となく「純金」の“連濁形”と紛れそうな気がしてしまう。もとより，そういう形は実在しないが。両方に出て来る「金銀」は切れ目の有無で発音が違うことになるが，これは（18）の対に

も関わる。前者はセットの扱いであるのに対して，後者は「金・銀・銅」に相当する。

(18)「金銀銅 [ŋ] 合わせて６個のメダル」対「金銀銅 [g] の３種のメダル」。

「塩化銀」以下は [g] もおかしいとは感じない。丸ごとの形の [ŋ] も可だが，専門用語で，前部要素が硬くて切れ目を思わせ，かつ「銀」の種類を意識させるためと思われる。

「銀」についてまとめると，銀自体と認める [g] か，銀以外に変容した存在の [ŋ] か，その中間（併用）かで分かれることになる[12]。

次に，同じ「銀」でも，「銀行」およびその短縮形としての「銀」はどうであろうか。

まず，後部要素としての「銀行」は，以下のようにすべて [g] である。

「津銀行（仮），三重銀行，みずほ銀行；岩手銀行，北日本銀行（岩手），千葉銀行」

ところが，(19) の短縮形になると，[ŋ] が主になるものと，[g] になるものとに分かれる。

(19) 日銀 [ŋ] < 日本銀行 [g]，都銀 [ŋ] < 都市銀行 [g]，地銀 [ŋ] < 地方銀行 [g]，勧銀 [ŋ] < 勧業銀行 [g]；

岩銀 [g] < 岩手銀行 [g]，北銀 [g] < 北日本銀行 [g]，千葉銀 [g] < 千葉銀行 [g]

もっとも，このうちの「日銀，都銀，地銀」は [g] も不可ではない。しかし，これらを前部要素に持つ複合語の「日銀総裁，都銀協会，地銀連合」は [ŋ] のみである。後部要素に来る「第一勧銀」は，もとより [ŋ] である。一方，「岩銀，北銀，千葉銀」は [g] のみで，「岩銀頭取」などでも [g] である。

この違いは，「- 銀」の前が（入声漢字音を含む）１音節か否かによると見られる。「岩銀，北銀」は岩手にあり，上京前から知っていた単語なので，方言の影響の可能性もある（4.10節参照）が，「千葉銀」はそれでは説明がつかない。

ちなみに，同じ短縮形であっても，「学」は「関学，青学」など [ŋ] のみである点が「銀」とは異なる。

### 4.6　独立用法をもつ「- ガン」のいろいろ（語種）

ガンにもいろいろある。語種別に見ても，漢語の「癌，眼」，語種未詳の「雁」，外来語の「ガン（gun）」などがある。「癌」は「ガン」とも書かれるが，発音には影響しない。

(20)「癌」:「胃癌，肺癌，子宮癌，肝臓癌，前立腺癌，十二指腸癌，抗癌剤」: すべて [ŋ]。

「眼」:「近眼，老眼，審美眼，千里眼，観察眼」: すべて [ŋ]。

「雁」:「子雁，真雁，カナダ雁，灰色雁」: [ŋ] だが，全体的に使用は稀。

お菓子の「落雁」も [ŋ]。人名「谷川‖雁」では，切れ目がある関係で [g] となる[13]。

「ガン（gun）」:「エアガン，スタンガン（〜- カ゜ン ?），マシンカ゜ン（〜- ガン ?），スピードガン（球速の。- カ゜ンだと「スピード眼 / 癌 / 雁」の意になるか）」。

このうち，gun は実はよく知らず，手にしたこともない。使用も稀で，ガかガ゜か迷う。ただし，外来語でも「ホーガ゜ン，レーガ゜ン（人名）；スローガ゜ン」などは [ŋ] で安定する。

### 4.7 「人柄 [ŋ]」と「鶏殻 [g]」

漢語・外来語以外では，「から」が濁音化して意味特化した「がら」が，複合の際に抽象 / 具体の違いに応じて [ŋ]/[g] になる。この意味差が他にも拡張可能となっている。架空の稀な例を含む説明になるが，その意味に応じて，自分の中では明確な使い分けが可能である。

(21)「人柄 [ŋ]」を [g] で発音すると，「人殻」，すなわち，“ スープ用の人骨 ” の意味になる。
　「鶏殻 [g]」を [ŋ] で発音すると，「鶏柄」，すなわち，“ 鶏の人柄 ” の意味になる。

その結果，(22) のような文が可能になる。

(22)「あの鶏は，生きているときは鶏柄 [ŋ] はよかったけど，絞めて鶏殻 [g] にしてみたら大したことはなかった。」

ただし，「鶏柄」に対して「鳥柄」であれば，「花柄」のように「鳥模様の柄」の意にもなる。従って，そこから (23) が言えることになる[14]。

(23)「鶏殻 [g] のような人が鳥柄 [ŋ] のシャツを着ている。」

これはさらに応用が利き，同じ「柄」でも「縞柄 [ŋ]」と「縞柄 [g]」は別の意味になる。

(24)「縞柄 [ŋ]」は，「縞模様」が醸し出す風合いの意。
　「縞柄 [g]」は，「縞模様」になっている「柄（がら）」，すなわち「縞の柄模様」の意。

両者の対比において，「縞柄 [ŋ]」においては「柄」の具体的な意味が薄れて抽象化している。それに対して，「縞柄 [g]」は「柄」の具体意味を保持している。そして，「色柄 [ŋ]」と「色柄 [g]」もほぼ平行的違いがある。ただし，後者は２単位アクセント形の「色・柄」が普通ではある。ちなみに，体の「大柄，小柄」は [ŋ]，普通の「殻（から）」は連濁して「茶カ゜ラ，貝カ゜ラ，籾カ゜ラ」等で [ŋ] になる。ただし，「炭殻」はタンカラで連濁せず，タンカ゜ラは異様な感じがする。

### 4.8　その他のガ行音語

残っている個別的なものをまとめて取り扱う。

一般に，外来語は後部要素では [g] で，４.６節の「– ガン（gun）」は，揺れながらも [ŋ] が出る意味では例外である。しかし，それ以外の下記の語例は [g] しかない。北陸方言など，「毒カ゜ス，消しコ゜ム」を言う方言もあるが，私の方言ではそれは不可で，[g] のみである。

(25)「毒ガス，炭酸ガス；輪ゴム，消しゴム；窓ガラス，Ｂ級グルメ，好ゲーム，…」：[g]

外来語に限らず，語頭がガ行音で始まる単語は，複合語の後部要素においても [g] で出る。

(26)「朝御飯，山牛蒡，白胡麻，生ゴミ，粗大ゴミ，花莫蓙（稀）」: [g]

これらを，連濁による「白駒」（駒も馬も。ただし稀），「人込み」の [ŋ] と比較されたい。

その稀な例外の一つに呪文の「開けコ゜マ」があるが，これは子供の時に文字で見て，意味不明のまま一まとまりの言葉として読んでいた形のためである。大人になって，「開け，胡麻！」だと知って驚愕した。今となっては，その前で切って - ゴマ [g] と発音するしかない。

その他に，次のような例もある。

(27)「側（ガワ）」:「右側，こっち側，手前側，どっち側，向こう側，…」: すべて [ŋ]。

「芸（ゲイ）」:「裏芸，表芸，お家芸，素人芸，殿様芸」: すべて [ŋ]。

「下駄（ゲタ）」:「庭下駄，塗り下駄，高下駄」: 迷うが [ŋ]。ただし，方言では [g] に。

「餓鬼（ガキ）」:「施餓鬼」[ŋ]（ただし，語源的繋がりは意識せず，むしろ別語）;「悪餓鬼」[ŋ]〜[g] ともに可であるが，- ガは方言的かもしれない。Cf.「串柿」[ŋ]。

「蟇（ガマ）」: 大蟇 [g]。JR 田沢湖線雫石駅の２つ隣の「大釜駅」はオーカ゜マ（後述）。

「ゲソ（烏賊の）」: イカゲソ [g]

「ガリ（生姜の）」: 新ガリ [g]　Cf. シンカ゜リ（最後）

「グル（仲間）」: 新グル [g]　　Cf. シンク゜ル（とダブル）

「グロ」: エログロ [g]（並列）Cf. イロク゜ロ（色黒）

「ギガ（容量）」: 1 ギガ [-giŋa] しかし，鼻音を含む２〜以降は [-ŋiŋa] が自然。５〜も。

さらに散発的になるが，外来語の切れ目に関連する現象を取り上げる。

まず，元は意味不明のまま丸ごと鼻音で覚えたが，その後，変化したものに（28）がある。

(28)「アプレ | ゲール」はケ゜だったが，原語を知ってゲに変えた。

「ナイチン | ゲール」は元はケ゜。何となく切れた感じだけで，「ゲール」は意味不明。

「フォア | グラ」も元はク゜。原語を知ってグに。ただし，アンク゜ラ，バイアク゜ラ。

次は，知識や対照される単語との関係で揺れのある例である。

(29)「レニンク゜ラード，ベオク゜ラード」等。今は知識で切れて「グ（ラート）」も可に。

「オブリケ゜ーション」は「デレケ゜ーション」（東京オリンピックで知った）などがあって並べて切れ目を意識するとゲも可だが，一方で，「オブリカ゜トリー」のみであることからケ゜も。

最後に，最初から切れるものとして口音で覚えたものに（30）がある。

(30)「ヴァイス | ゲルバー」のみ。大学院で知った。Weiss や Gerber が意識される。

「ランボル | ギーニ」のみ。息子のおもちゃで知った。意味不明ながら切れる感じ。

### 4.9　ガ行鼻音の誤れる回避

（27）の「大釜」は，地元の人間は「オーカ゜マ」としか言わないが，駅名は「おおかま」とある。旧国鉄がローマ字化する際に，訛った形と捉えて“正した”ものに違いない。それ以来使われ続け，今では「-かま」が正しい形だとする人が増えている可能性がある[15]。

同じく，「尾久」[ŋ] も駅名は「おく」で，伝統的な地名の読み「オク゜」との違いが問題になっている。こちらは「おく」と発音する人が実際にかなり増えている。都会で外部の人が増えると，新しい発音が文字表記の規範力と共にますます勢力を持つ図式になっている。

沖縄の「与那国」[ŋ] も，よく「よなくに」と表記される。「ヨナクニサン」（蝶。与那国蚕），巡視船やフェリーの名前などである。与那国島方言は，琉球方言の北端の奄美喜界島方言とともにガ行鼻音を持つ数少ない方言である。もっとも，地元では自分たちの島を普通 dunaN と言い，蝶もアヤミハビルと呼ぶが。

最後に，かなり複雑な問題のようであるが，「茨城」のイバラキ゜/イバラキがある。『和名抄』や『常陸国風土記』を論拠に公式名は「いばらき」となっていることは確かであり，イバラキ゜ないしイバラギの誤りを糾弾してイバラキだと主張する論がネットに溢れていることも知っている。しかし一方で，茨城県人でイバラキ゜とする人を２人知っているし，私の知る東京出身の著名な音声学者，言語学者は全員イバラキ゜で，私自身もイバラキ゜以外使ったことがない。また，奄美･沖縄で全国の都道府県名のアクセントを調べているが，これまで調べた全員がイバラキ゜（ガ行鼻音を持つ喜界島と与那国島），イバラギ（ガ行鼻音を持たない与論島，久米島など）であった事実を報告しておきたい。厳密に言えば，喜界島に唯一人イバラキと言う人がいたが，その人は元校長で，かつて茨城県に研修に行った際にイバラキ゜をイバラキと直された経験があるからとのことであった。私が知りたいのはどちらが「正しい」かではない。上記の事実を含めた総体をどのように捉えるかである。学校教育も含めた，さまざまな問題が絡んでいる可能性がある[16]。

京都の「上京区」[ŋ] を Kamikyo-ku とローマ字表記する例も含めて，ガ行鼻音を訛りとする意識，さらに広く言えば，連濁を単独形から“訛った”ものとして忌避する態度がその背後に見られる。日本酒の銘柄は，連濁を避けて澄んだ味を訴える傾向が顕著に見られる。ガ行音の例で言えば，「浦霞」（うらかすみ）もその一つであろう。他の分野では，「久留米かすり（絣）」や「越前かに（蟹）」などもある。私なら，すべてガ行鼻音で言うところである。

### 4.10　私の中で方言と標準語で異なる例

今まで述べてきた前提として，ガ行鼻音に関しては，方言でも標準語でも私の中では同じであるとしてきた。しかし, 細かく見ると, 違いのある例が若干ある。(31)の最初の「郡」は全国に当てはまると思うものの，確実なのは子供の時から使ってきた身近な郡である。「日銀」は方言で言おうとすると稀なので迷い，逆に「岩銀」は標準語の方で迷う。

| (31) | 方言 | 標準語 |
|---|---|---|
| 岩手郡，紫波（しわ）郡 | [g] | [ŋ] |
| 日銀, 岩銀 < 岩手銀行 | [g], 日銀（?） | [ŋ], 岩銀（?） |
| 毒蛾　Cf. 毒牙 [ŋ] | [g] | [ŋ] |
| 仰々しい | [g] | [ŋ] |
| 庭下駄（稀） | [g] | [ŋ] |
| 置き碁（稀） | [g]? | [ŋ]? |

いずれも，方言 [g]，標準語 [ŋ] の例のみである。特に意識したことはなかったが，標準語の方がより発音がなめらか（融合的, 独立性弱し）という感覚の反映なのかもしれない。

## 5. 辞典の外来語形と私のガ行音

### 5.1 『明解国語辞典』（1960，改訂72版，三省堂）

これは, たまたま中学生の時に親が買ってくれた辞典を捨てずに持っていたのであるが, 期せずして私が外来語に接していた時期と重なる上に，当時の国語辞典としては外来語をたくさん収録していて，かつそれを表音式仮名遣でガ行鼻音もカ゜の形で表記しているために，非常に貴重な資料となる。

そのア行の外来語をすべて抜き出して私の発音と比べたのが（32）である。*印付きの単語が辞書と異なっている。カタカナ書きは私の発音で,「アマルカ゜ム*」とあれば，私はガ行鼻音を使って「アマルカ゜ム」と発音するが，辞書には「アマルガム」で出ている意である。「|」は私が挿入した切れ目の印で，下線を付した単語とともに，このあと取り上げる。なお,「アラビア」と「アラビヤ」などの表記差は問題としない。

(32) アスパラ | ガス（cf. アスパラ）, アバン | ギャルド , アフカ゜ニスタン , アマルカ゜ム*, アラビア | ゴム , アレク゜ロ*, アレルキ゜ー*, アンク゜ル , アンク゜ロサクソン , イデオロキ゜ー, イレキ゜ュラー*, インテリケ゜ンチャー*～インテリ | ゲンチャー（cf. インテリ）, ウルク゜アイ*, エコ゜イスチック, エコ゜イスト, エネルキ゜ー*, エネルキ゜ッシュ*, エレカ゜ント*, エンケ゜ル（の法則）*, オ（ッ）シロ | グラフ , オペラ | グラス ,

オメカ゜, オルク゜, オルコ゜ール

形態素境界を入れた多くは,「オペラ | グラス」に代表されるように，恐らく異論のないもので，その境界の後は，元々の [g] で発音される。ところが，下線部はそうではない。「アスパラ | ガス」は [g] であり，あたかも後部要素が - ガスのように振る舞う[17]。しかし，だからと言って，ガスの仲間（都市ガス，プロパンガス，排ガス等 [g]）とは毛頭思っていない。そうではないにもかかわらずそこで切れるのは，省略語の「アスパラ」が別にあり, それが取り出された後の残りだからである。「- ガス」は結果として取り出されてしまったものである。

「インテリケ゜ンチャー〜インテリ | ゲンチャー」の後者「- ゲンチャー」にも特定の意味はない。これも，その前の「インテリ」が省略語として単独で多用されるようになったことから取り出された結果に過ぎない。それを意識しなければ，この単語は [ŋ] で出る。これらは，いわば，省略語の結果として取り残された後部要素ということになる。

## 5.2 『NHK日本語発音アクセント辞典』新版（2008, 第33刷）「外国の地名」

この辞典は，今となっては旧版となっているが,「外国の地名」のリストが出ているので利用した（元の講演時には，これが最新版であったという事情もある）。ただし，これにはガ行鼻音表記はなされていない[18]。以下に示すのはあくまでも私の発音で，[ŋ] であるか [g] であるかで大別して掲げる。76語中ほぼすべてを [ŋ] で発音し，[g] は切れ目のある「シュツット | ガルト，ヘルツェ| ゴビナ」の２語のみである。揺れを含めても最大４語しかない。

(33) [ŋ]：アンコ゜ラ，ウイク゜ル，ウカ゜ンダ，ガラパコ゜ス，カルカ゜リー，グラスコ゜ー，シカコ゜，シンカ゜ポール，セネカ゜ル，チク゜リス，トンカ゜，ナイアカ゜ラ，ニカラク゜ア，（パプア）ニューキ゜ニア，ノッティンカ゜ム，ハンカ゜リー，バンク゜ラデシュ，ベンカ゜ル，ブルカ゜リア，ボルカ゜，ポルトカ゜ル，マダカ゜スカル，ミシカ゜ン，モンコ゜ル，ヤンコ゜ン，ユーコ゜スラビア，ユンク゜フラウ，ラスベカ゜ス，リカ゜等。

[g]：シュツット | ガルト，ヘルツェ| ゴビナのみ（許容として，最近ワインで頻用するようになったブルゴーニュと，稀で自信がないがパタゴニアが入るぐらい）。

## 5.3 カタカナ語

### 5.3.1 タイカ゜ーは過剰矯正の結果か

これまでに出てきたいくつかの外来語に関連するテーマを取り上げる。

まず，かつてある講演で，「タイガー」（tiger）を「タイカ゜ー」と言う人がいるが，これは過剰矯正（hypercorrection）であるとする主張を聞いた。ガ行鼻音を失った人が，“正しい発音”を求めるあまりに本来は [g] であるのに間違って [ŋ] にしてしまったもの，とする解釈であった。確かに，広い世の中にはそういう人もいたとしてもおかしくはない。

しかしながら，それは過渡期に生じた少数例に過ぎないであろう。(6) に見たように，鼻音を持っている有識者全員が「タイカ゜ー」であるときに，それが過剰矯正によるものとは到底考えられない。私自身，「タイカ゜ー」を発するのに，これまでただの一度も迷った記憶がない。小学生の時に「阪神タイカ゜ース」を知ったが，英語を習う前であったし，その意味も，「タイカ゜ー」との関係も，そもそも英語かどうかも，何も知らずにガ行鼻音で発音していた。最初から「タイカ゜ー（ス）」以外はありえず，後になって出てきた商品「タイカ゜ー魔法瓶」も同様であった。その時は，虎の絵が付いていて，英語も習っていたと思うが。

その私が「タイガー」[g] を聞くと，自動的に「ガー」[g] という単語が切り出され，「虎」ではない，（おそらくは熱帯の）別の猛獣の存在が浮上してくる。次のような複合語がある中の一種で，タイ（国）に固有の種ということになる。

「インドネシア | ガー，スマトラ | ガー，アフリカ | ガー」[g]（アクセントはすべてガに）。

この話は，講義で冗談半分に話したことがあるが，後に，テレビを見ていて，古代魚に「ガー」というものが本当にいることを知って驚いた。大きかったが動作が緩慢で，私が想像していたものとは随分違ってはいたが。

### 5.3.2 「アマルカ゜ム」と「チューインガム」

ガかカ゜かの違いは，思わぬ違った意味の単語を想起させる。その例をさらに見てみよう。

「アマルカ゜ム」を口音で「アマルガム」と言われると，ガムの前に切れ目を感じ，食べるガムの一種かと思ってしまう。

哲学者の「ヘーケ゜ル」も，「ヘーゲル」だと「○○ゾル」の対「○○ | ゲル」を思わせる。「シュレーケ゜ル，ブリューケ゜ル，ワン（ダー・フォー）ケ゜ル」等も同様である。ただその一方で，原語上では gel である「シリカケ゜ル」は，その意識なしに [ŋ] で使っている。

逆に，「チューイン | ガム」を鼻音で「チューインカ゜ム」と言うと，同じ鼻音の「バーミンカ゜ム」の隣にある（!）架空の都市名になってしまう。アクセントも⑤型から③型に変わる。

「ニューキ゜ニア」（地名）と「ニュー| ギニア」（新しいギニア，新生ギニア）は別である。前者は切れ目を感じない，単なる地名である。あたかも「ニューヨーク」が切れずに，丸

ごと覚えた形であるのと並行的である。「ヨーク」の存在を知ったのはずっと後のことで，それ以前は“新しいヨーク”などでは決してなかった。今でさえ，そうは思っていない。

「ドコ゜ール」（人名，空港名）対「セカンド|ゴール」から，「キルケコ゜ール」（人名）も [g] だとゴールのようで変になる。「シャカ゜ール」（人名）も [g] で発音すると，もはや古くなったが，「小沢|ガール（ズ）」[g] への連想で「謝|ガール」（謝も人名）かと思ってしまう。

### 5.3.3　原語の発音は無関係

外来語の場合，よく「原語の発音」が持ち出されるが，少なくとも私にとっては「原語の発音」は全く無関係である。そもそも何語から来たのかも知らず，ましてやその音声を聞くことなどないのである。カタカナを目にした段階で，無標なら [ŋ]，切れ目など何らかの有標の構造のみ [g] と決まる。これが外来語の発音を決める仕組みとなっている。「ブルコ゜ーニュ，スパケ゜ッティー，チケ゜鍋」等も /ŋV/ を持たない言語から入ってきたものであることを，一体どれくらいの人が知っているのであろうか。そういう知識とは無関係に，私にとってこれらはガ行鼻音と決まっているのである。その意味では，「外来語」より，むしろ「カタカナ語」と言う方が適切だと考える。

## 6. 外国語と方言音声との関係

原語の話題になったところで，外国語，とりわけ，英語の綴りと方言の発音との関係を見てみよう。以下，綴りは <g> のように <> に入れて示す。

### 6.1　英語綴り <g><ng> と方言発音の関係

英語の説明に入る前に，いわば“英語の鼻濁音”に相当する [ŋ] の由来を概観しておく。日本語と同様，英語にも [ŋ] はもともと存在せず，後から生じたもので，しかも語頭には出ないという共通点がある。[ŋ] がなかったことは，単一の綴りがなく，<ng> の組み合わせで示されていることに反映している。その綴りの示すとおり，元々は [ŋg] の音であった。それが，やがて語末の [g] が落ちる変化が起こり，[ŋg] > [ŋ] の結果，sing [siŋg] > [siŋ] になって，[ŋ] が Sim の [m] や sin の [n] と対立することになった（例は過去分詞の sung 対 sum 対 sun でもよい）。元々<ng> は語頭に立つ例はなかったし，仮にあったとしても語頭ではこの変化は起きなかったので，今日でも [ŋ] が語頭に立つことはない。本来の語中では [ŋg] のまま残った。その結果，singer と finger は，前者は元の動詞が語末環境で [ŋ]

になったものに -er が付いたので [ŋ] であるのに対して，後者は最初から語中のため [ŋg] のまま残り，両者の発音は区別される。ただし，同じ綴りの -er でも，形容詞の比較級・最上級は異なり，long [ŋ] に対して，longer, longest は元の [ŋg] のままである。（このあたりは, ほとんどの日本人がそれぞれ違う箇所で間違えてしまう。ガ行鼻音を持つ人はフィンカ゜ーと，持たない人はスィンガーとしてしまうのである。後述のように，私もフィンカ゜ー派である。）一方, <g> は [g] のまま残り, どの位置にも現われる。以上が概要である。

さて，その英語の <g> と <ng> を私はどう発音しているか。以下，後続母音を問題にしない場合のカナ書きは,（最も母音要素の弱い）「グ，ク゜，ンク゜」で表わすことにする。

問題の tiger（タイカ゜ー）, そして sugar（シュカ゜ー）, figure（フィキ゜ュア。スケート競技のみで，人形には使ったことなし）等の <g> はすべて鼻音ク゜で発音していた。中学 1 年で英語を習った時から（figure はもっと後に覚えたかもしれないが）ずっとそうで，専門課程で音声学を習うまではそれが正しいと思い込んでいた。

以下は推測を交えた話になるが，日本語の仮名で非語頭の < が > は鼻音カ゜で，ローマ字書きでも <ng> とせずに <g> と書く以上（例：「てがみ，tegami」で [ŋ] と発音），英語でも非語頭の <g> は [ŋ] だと無意識のうちに理解していた可能性が高い[19]。ただし，big, dog 等は促音が入った「ビッグ，ドッグ」等になるため，日本語の仕組みとしてそもそも鼻音で出ることはない。それも，当時は，英語でも「ビック，ドック」と清音で発音していたはずで, 日本語としては今でもそうとしか発音しない。bag と back も同じ「バック」である。

一方，<ng> は，singer と finger の区別はなく，ともに「ンク゜」としていた。<g> の「ク゜」も共にガ行鼻音であるが，<ng> はその前に撥音が入ることで区別していたことになる。両者を併せて，英語の発音とともに示すと，（34）のようになる（「イギリス」は英語由来ではないとされるので省いた）。記号の <-> は対立，＝は同一発音の意。

| （34）非語頭の <g>:「ク゜」 | <ng>: 2 種の区別なく「ンク゜」 |
|---|---|
| cigar [g] | singer [ŋ] <-> finger [ŋg]（single, hungry も） |
| スィカ゜ー | スィンカ゜ー ＝ フィンカ゜ー |
| log [g] | long [ŋ] <-> longer, longest [ŋg] |
| ロク゜（対数） | ロンク゜ ＝ ロンカ゜ー，ロンケ゜スト |
| — | English, England [ŋ, ŋg]（ともに両様の発音あり） |
| イキ゜リス（エケ゜レス） | インク゜リッシュ，インク゜ランドのみ |

以上が方言発音の大筋であるが，細かく見てみると，さらにいろいろある。次に，とりわけ「接頭辞」の働きが方言のガ行音に影響していることを見る。

### 6.2　接頭辞の後の <g> はグで発音

以下の（35）の例を見てみよう。下線は中学から高校の初期ごろに習ったと記憶する単語に付した。比較的古い段階で身に付けた単語の印である。ˈ は，その直後の音節にアクセントがあることを表わす。これらの <g> は，私は日本語としてもグで発音している。

（35）aˈgain, aˈgainst, aˈgo, aˈgree; beˈgin, beˈginner; forˈget, forˈgive; reˈgret;
ˈprogram; ˈteleˌgram, ˈteleˌgraph; ˈprogress（n）, proˈgress（v）; reˈgress;
anti-ˈgovernment; disˈguise; inˈglorious; overˈgrow; ˈsubgroup; unˈgraceful

これらを見ると，a-, be-, for-, re- 等の接頭辞の後は切れ目があって，英語は当然 [g] であるが，日本語としても，6.1で見たのとは異なり，口音のグで発音していることが分かる[20]。

### 6.3　ドイツ語も前綴りの後の <g> はグ

最後に，ドイツ語における接頭辞と私の発音との関係を取り上げる。

ドイツ語の「前綴り」は「分離前綴り」と「非分離前綴り」があり，分離前綴りは自らアクセントも持っていて英語の接頭辞よりも自立性が高いが，どちらの前綴りでも切れ目の役割を果たし，その後の <g> は私は口音のグで発音する。鼻音のク゜で言うことはない。

（36）beˈginnen; ˈan|geben, heˈraus|gehen; ˈAusgang, ˈEingang: すべてグ

現在～過去～過去分詞の活用でも同様である。そこに出てくる <ng> はンク゜となる。

（37）geben, gab, geˈgeben ゲーベン，ガープ，ゲゲーベン
gehen, ging, geˈgangen ゲーエン，ギンク゜，ゲガンケ゜ン
beˈginnen, beˈgann, beˈgonnen ベギネン，ベガン，ベゴネン

ちなみに，ドイツ語から日本語に入った借用語では，次のようになっている。

（38）Allerˈgie, Enerˈgie, Ideoloˈgie, Kollaˈgen, ˈBogen（弓）

私の方言では，これらをすべてガ行鼻音にして，アレルキ゜ー②，エネルキ゜ー②，イデオロキ゜ー⑤，コラーケ゜ン②，ボーケ゜ン①（最後の例は稀）と言っている。アクセントは２音節語の Bogen 以外はすべてずれている。

## 7．まとめ

以上，ガ行鼻音 [ŋ] とガ行口音 [g] との対立の諸相を，部分的な交錯としての揺れも含めて詳述した。私のガ行音は，外来語も含めて，語中は特別な切れ目がなければ鼻音 [ŋ] となるのが原則であるが，語中に口音 [g] が出ればその前に必ず切れ目があるとは言えて

も，逆に，特定の接頭辞以外にその切れ目を完全に予測するのは困難で，意味も含めたさまざまな要因が関与する，という結論になる。しかし，かくて両者は別音素，と主張するのが本稿のねらいではない。私にとって [ŋ] と [g] は最初からはっきり違った存在で，その別音素という前提の上で，両者が織りなす複雑で面白い言語現象を提示し，分析したものである。

**［参照文献］**

秋永一枝編（2014）『新明解日本語アクセント辞典　第２版　CD付き』，三省堂.

上野善道編（1989）『日本方言音韻総覧付方言音節引き索引』，小学館.

上野善道（1993）「音の構造」，193-249. 風間喜代三・上野善道・松村一登・町田健『言語学』初版，東京大学出版会.

上野善道（2014）「鼻濁音」，佐藤武義・前田富祺編『日本語大事典下』，朝倉書店，1687-1689.【¯ が g などの真上に付いているのは，音声記号としては g などの前に移す。摩擦音記号 ɣ も誤植。一般に本事典の拙稿は校正結果が適切に反映されていない項目が多数あり，特に「融合」は意味不明の箇所がある。】

亀井孝（1956）「ガ行のかな」『国語と国文学』33（9）. 同（1984）『日本語のすがたとこころ』, 吉川弘文館, 1-25に再録.

金田一春彦（1942）「ガ行鼻音論」，國語學振興會『現代日本語の研究』，白水社，197-247，同（1967）『日本語音韻の研究』，東京堂出版，168-197に再録.

神保格・常深千里（1932）『國語發音アクセント辭典』，厚生閣.

寺川喜四男・日下三好（1944）『標準日本語發音大辭典』，大雅堂.

永田吉太郎（1935）「舊市域の音韻語法」，斎藤秀一編『東京方言集』，私家版，18-143.

村上由美（2009）『声と話し方のトレーニング』平凡社新書.

**［付記］** 本論文は，2010年10月９日に日本音声学会第24回全国大会（國學院大學）での講演「鼻濁音考」，及び2015年９月15日に国立国語研究所の NINJAL コロキウムで話した「鼻濁音２題」の中から，共通する「ガ行鼻音」に関する部分を取り出してまとめたものである。今一つの「鼻濁音」である前鼻音化濁音に関しては，紙幅の関係で別稿に譲る。

本稿は JSPS 科学研究費19H00530（代表者：窪薗晴夫）による研究成果の一部である。同時に，国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照言語学の観点から見た日本語の音声と文法」（プロジェクトリーダー：窪薗晴夫），並びに「日本の消滅危機言語･方言の記録とドキュメンテーションの作成」（プロジェクトリーダー：木部暢子）の研究成果も兼ねる。

**注**

1　早いところでは，神保格・常深千里（1932）の神保による解説（p. 18）に「折角この區別を惠まれてゐる近畿地方の人々が，わざわざ通鼻音カ゜キ゜ク゜ケ゜コ゜を捨ててガギグケゴばかりを使はうとする傾向のあるのは一體どうしたことか。しかもこの傾向が近来東京にもあらはれかかつたやうに思はれる。そしてどちらも無學の者よりも知識階級の人々に多い。」とある。他の指摘もあるが，この衰退現象がよく知られるようになったのは，金田一春彦（1942）に依る。

2　一例として，たまたま手に取った村上由美（2009）に次の文がある。「格助詞の「が」【中略】を「んが」と，鼻濁音【中略】で発音するとやわらかく聞こえます。【中略】ただし鼻濁音は，格助詞以外に頻繁に使うと，しつこい感じになるので要注意です。」（p. 135），「説得力を増すために，少し漢語を増やしてみるとか，鼻濁音の「んが」ではなくて，「が」という音ではっきり話すと，ハキハキしていてかつ自信を持って話している，という印象を与えることができます。」（p. 139）。引用箇所はどちらも太字で印刷されている。下線は引用に当たって付した。

3　かつて私は，「ガ行鼻音の解釈には，その人の母語にその区別があるか否かが影響を与えている可能性がある。」と書いたことがある（上野1993: 243）。ただ，これは教科書に書くのは必ずしも適当ではないと考えて第２版では削除したが，私自身の考えには何の変更もない。

　なお，逆に，ガ行鼻音を持っていながら両者の音韻的対立を認めない人も稀にいるが，データをきちんと踏まえているだけに，結論への賛否は別にして，その論は読ませるものを持っている。その代表を１つだけ挙げるなら，東京出身の亀井孝の論（1956）である。

4　なお，（c）にはアクセント単位が１つか２つかの問題もあるが，標準語では１句で発音すると同じになるので問題にしない。私の方言ではニホンコ゜ガッ[ カイシとニホン [ コ゜| ガッ[ カイシの区別が生ずる（昇り核表示）。

5　永田吉太郎（1935: 22）には，「図画」[ŋ] に対して「洋画」[g] とあるが，私は [ŋ] のみ。

6　ただし，川上蓁氏のご教示によると，地唄にゴソコ゜ソ，謡曲・長唄にゲニケ゜ニがある由。

7　講演後に東京出身者から，「不具合」自体が新しい言い方で，まだ馴染んでいないように感ずるとのコメントがあった。そうだとなると，それが理由で「不」との結合がまだ十分ではないために [g] が出る，ということになろう。なお，川上蓁氏も「不～」の中で「不具合」だけは [g] であった。ただし『日本国語大辞典』に1792年の初出例があり，それからの一般化は遅かった可能性もある。

8　４人は著名な研究者の故川上蓁，故大島一郎，故秋永一枝，風間喜代三の諸先生で，直接発音してくださったり，内省報告を記録して渡してくださったりした。厚く御礼を申し上げる。最後の伊藤亜美氏は，2010年東京言語研究所における私の「音声学」を受講した方である。まだ若いにもかかわらず，授業中の発言にガ行鼻音がよく出ていたので，講義後に改めて発音をしてもらったところ，[ŋ] が整然と現われてその内省もしっかりしていた。そこで，この語彙リストを含む調査表を渡して内省報告をお

願いしたところ，その結果は私と完全に一致すると言っていいものであった。四谷で江戸っ子の家系に生まれ，通学地域は目白と高田馬場，通勤地は本郷と四谷。お祖父さんお祖母さんと同居していたと言う。氏の了解も得て，ここに発表する。

9　ついでにその「ハンバーグ」に注記をすれば，私も元は「ハンバーク」だった。今では - ク゜。

10　この時のことは衝撃的だったのでよく覚えている。日本語学会の責任者になり，その運営をどうすべきか，あれこれ考えながら家に向かっていた時に，ふと「日本語学 [g] 会」が自分の口をついて出てきて驚き，自ら強くそれを否定したのであるが，その後も流れは止まっていない。

11　ただし，「いくつの」の意味では何(なん)学会は [g] となる。いくつの学校なら「何校」が普通。

12　永田（1935: 21）に，人名「お銀さん」は下町風だとキ゜ンではないか，とあるが，私はギン。

13　寺川喜四男・日下三好（1944: 解64）に「大高源吾」- ケ゜ンコ゜の例があるが，私は - ゲ。

14　講演のハンドアウトを読んだ新田哲夫氏からのコメントに付された例文による。氏は1958年福井市（無アクセント地域）生まれで，北陸方言話者としてガ行鼻音をよく保っており，私との異同を書いてくれた資料を見ると，細部に地域差・個人差はあるものの，全体として非常に良く一致する。なお，氏は「チューインカ゜ム」で，そこには「噛む」の意識が少しあるという。

15　田沢湖線で子供連れの母親と乗り合わせたことがあった。子供は文字を覚えたてで，駅名を興味を持って一つ一つ読み上げていた。「大釜駅」に着いた時，子供に駅名を聞かれた母親は「オーカ゜マ」と答えたが，駅の表示を読み始めた子供は，「オ・オ」の後で止まってしまい，しばらく考えて「お母さん，オ・オ・カ・マって書いてあるよ」と言った。母親は表示を見て当惑し，結局「いいの，どっちでも！」と答えたのであったが，私は心の中で大いに同情した。

16　話は少し飛ぶが，私の出身地「岩手県」は，誰もがイワテと言うに違いない。しかし，祖父母は juwa¯dekeN（アクセントは②型）と言っていた。「岩」は juwa，「鰯」は juwasu，「祝い事」は juwEkodo で，ju は wa の前における i の変化であるが，¯de の前鼻音は元は濁音であった証拠である。つまり，イワデでなければならないところである。「陸奥のいはでしのぶは」が「言わずに」の意味で頻用されるのは，音声そのものが「いはで」に対応する形であって，清濁は問題にせずに掛けたものではなかった。そのイワデが，いつから，なぜイワテになったのかは，別途精査すべき課題である。「茨城」も古文献からイバラキが正しいとするだけではなく，なぜ，いつごろから，おそらくは全国レベルでイバラキ゜（ガ行鼻音のない地域ではイバラギ）になったのか，それが知りたいことである。

17　この単語を講演で取り上げた後，これだけが標準語アクセントではなかったとの指摘を受けた。それはよく分かる。アスパラガ ] スと発音したからである。これは私自身のアクセントの反映であるが，同時にプロパン : プロパンガ ] ス = アスパラ : アスパラガ ] スの関係を示すためでもあった。標準語の④型ないし③型で発音すると - カ゜スになりそうで，私の主張の狙いが外れてしまうからである。- ガスのためにはガにアクセントが必要なのであった。

18 「この辞典の使い方」には「外来語（地人名を含む）のガ行音は，原語の発音が鼻音のものを除き，原則として，ガ，ギ，グ，ゲ，ゴで示した。しかし日本語に溶けこんでいるものは，鼻音で発音してもよい。」とあるが，私に付した下線部の鼻音表記例は皆無であった。

関連して，秋永一枝（2014: 24）には，次のようにある。ゴチはナミにし，本題ではないアクセント表記は除いて引用する。利用に際し，私が付した下線部に留意する必要がある。

> 外来語のうち，原音が既に鼻音のもの（キンク゜king，ボクシンク゜boxing），及び古くから入った語（オルカ゜ン organ，イキ゜リス Ingrez）は，ガ行鼻音で発音されることが多い。それ以外のものは，人により語により，ガ行音であったり，ガ行鼻音であったりする。東京の中・高年層は，和語・漢語と同様にこれらもガ行鼻音で発音する傾向が高いが，英語教育の普及した現在，和語・漢語よりも早く語頭以外のガ行鼻音が衰退しつつある。そこで，上記以外の外来語は原則としてガ行音で表記することにした。

19 さらに推測を押し進めると，中学の英語の先生も岩手県出身だったはずで，その先生も [ŋ] で発音して教えてくれた可能性さえ考えられるが，最早その確認は不可能である。

20 今一つの可能性は，カタカナ語でも切れる要素（グループ，グラフ，グラム）を別にすると，切れ目よりも，（第２も含む）アクセントのある音節が [g] になる，とする案である。そう考えると，ˈpregnant を前は確かク゜で発音していたことと，ˈCongress（n），congratuˈlation（s）のンク゜もそれで説明できる。プログラムも当初はク゜で言っていた気がすることも好都合である。しかし一方で，ˈprogress（n），proˈgress（v）（さらには ˈCongress（n），conˈgress（v））のように名詞と動詞でアクセントの位置が違っていたことを知っていたのかはなはだ疑問で，それに応じて鼻音と口音を使い分けることはなかった。それを考えると，a-, be-, for-, re- という接頭辞は，切れ目が意識されるために [g] で発音し，短くて弱いがゆえにその後に置かれるアクセントは，一見それに連動するように見えるものとしておく。その方が，後述のドイツ語とも整合性が取れる。